

上小倉横穴墓

大分県南海部郡弥生町大字上小倉
所在の横穴墓発掘調査報告

弥生町文化財調査報告書第2集

1993

弥生町教育委員会

上小倉横穴墓

大分県南海部郡弥生町大字上小倉
所在の横穴墓発掘調査報告

弥生町文化財調査報告書第2集

1993

弥生町教育委員会

序 文

弥生町の上小倉横穴墓の発掘調査については平成2年度の報告書にきわめて概括的なことではあるが記してある。

すなわち、この横穴墓の散在する丘陵地帯の急傾斜地崩壊対策事業の施工による調査が行われたが今までは出土品の発見はなかった。

本年度、工事を進める中で横穴墓と埋蔵品が偶然発掘された。その事実を知った私たちはにわかにも色めき立った。

ここの横穴墓からはかつて土師器や須恵器が出ていた。しかしそれは、多くの町民にとっては「横穴から何か出た」というぐらいの認識しかなく、好事家の興味をそそるにとどまっていたといっても過言ではあるまい。

この度は、発掘にしても、町文化財調査委員長の前藤太氏をはじめ調査委員の全員、なお、弥生町文化財愛護婦人会の御手洗峯子会長さんをはじめとする会員の方々の献身的な作業によって行われたことは忘れることはできない。

特に8月からの猛暑の中、上記の方々の興味と関心をそそらせながら、汗と泥にまみれて自ら発掘に従事されご指導いただいた県教育委員会文化課の高橋徹先生、玉永光洋先生、縮貫俊一先生のご尽力には頭の下がる思いがする。本誌を借りて心から謝意を捧げたい。

先にもふれたが、かつて出土した土器などは弥生の町民の幾人の眼にふれただろうか。

しかし、この度の発掘では、勾玉、管玉、水晶玉、耳環、土師器、須恵器等を自らの手で掘り出したことは忘れえない感慨であろう。しかも、それが完全な形で地表に出てきたことは、感激をいっそう深いものにしたことだと思う。

特に感銘を深くしたのは、県文化課の方々が、本町の小中学生や希望者に、資料を用意していただいて説明して下さったことである。わがふるさと弥生の歴史を学び、郷土への愛着心を抱かせるには格好の教材とご指導であった。誇りある文化と歴史のなかに豊かに育っていく子供たちを夢見たいものである。

今まではまったく無縁というに等しい上小倉横穴墓と私たち弥生町民の距離は一気に縮まって来たといってもいいだろうし、この度の発掘が、さらに弥生の文化の発展の礎石になることをねがうものである。

平成5年3月

弥生町教育委員会

教育長 宮 脇 和 敏

例 言

1. 本書は弥生町教育委員会が平成4年度に実施した大分県南海部郡弥生町大字上小倉所在の「上小倉横穴墓群」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は弥生町上小倉地区急傾斜地崩壊対策事業に伴うものである。調査は弥生町教育委員会が主体となり、大分県教育庁文化課埋蔵文化財係職員が実際の調査を担当した。
3. 遺構、遺物の実測、撮影は県文化課高橋徹、同小林昭彦、同緒貫俊一が行った。
4. 本書の執筆は主として高橋が行ったが、一部小野英治が分担した箇所がある。遺構、遺物のトレースは井口あけみと高橋が行い、編集は井口の協力を得て高橋が担当した。

※出土遺物実測図の（ ）の番号は遺構平面・断面実測図の出土番号と対応する。

目 次

本文目次

I 調査の経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 遺構	4
1号横穴墓	5
2号横穴墓	7
3号横穴墓	8
4号横穴墓	8
5号横穴墓	12
6号横穴墓	13
7号横穴墓	16
8号横穴墓	17
9号横穴墓	17
10号横穴墓	19
11号横穴墓	19
その他	21
IV まとめ	22

挿図目次

第1図 弥生町位置図	1
第2図 上小倉横穴墓位置図	3
第3図 調査横穴墓配置図	4
第4図 1号横穴墓平面・断面実測図	5
第5図 1号横穴墓出土遺物実測図	6
第6図 2号横穴墓出土遺物実測図	7
第7図 2号横穴墓平面・断面実測図	7
第8図 3号横穴墓平面・断面実測図	8
第9図 4号横穴墓平面・断面実測図	9
第10図 4号横穴墓出土遺物実測図(1)	10
第11図 4号横穴墓出土遺物実測図(2)	11
第12図 5号横穴墓平面・断面実測図	12
第13図 5号横穴墓出土遺物実測図	13
第14図 6号横穴墓平面・断面実測図	14
第15図 6号横穴墓出土遺物実測図	15

插图目次

第16图	7号横穴墓平面・断面实测图	16
第17图	8号横穴墓平面・断面实测图	17
第18图	9号横穴墓平面・断面实测图	18
第19图	9号横穴墓出土遗物实测图	18
第20图	10号横穴墓平面・断面实测图	19
第21图	11号横穴墓平面・断面实测图	20
第22图	11号横穴墓出土遗物实测图	20
第23图	6号横穴墓北側遺構实测图	21
第24图	6号横穴墓北側遺構出土遺物实测图	21

写真图版目次

图版 1	遺跡遠景、1号横穴墓檢出狀況	24
图版 2	1号横穴墓遺物出土狀況、4号横穴墓檢出狀況	25
图版 3	6号横穴墓檢出狀況、9号横穴墓檢出狀況	26
图版 4	横穴墓出土遺物写真(1)	27
图版 5	横穴墓出土遺物写真(2)	28

I 調査の経過

弥生町大字上小倉の雨籠山(標高68.2m)の東面山腹に位置する町指定史跡(周知遺跡)横穴墓群は、平成2年度から4年度にかけて、大分県佐伯土木事務所の急傾斜地崩壊対策事業に伴い、緊急発掘調査として大分県教育庁文化課の指導で実施された。

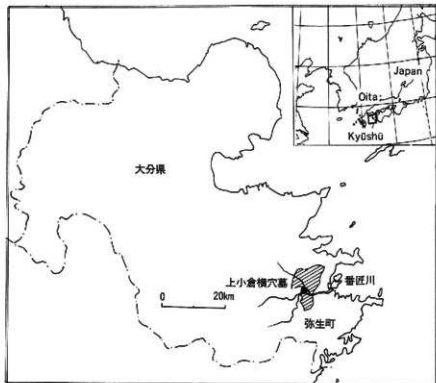
この発掘調査は、本年度が3年次である。初年の平成2年度では調査による出土品はなかったが、該当する横穴墓と以前に出土していた土器類の実測図が取められ「弥生町文化財調査報告書第1集、上小倉横穴墓」として発行されている。

なお、崩壊対策工事では、可能な限り、横穴墓を保存する工法がとられたことは喜ばしいことであった。

平成3年度は当該横穴墓がなく、報告書の発行はなかった。

平成4年度は、前年度の継続工事に伴う発掘調査となったが、当初は横穴墓が存在しないと考えられていた所から、上部は崩れているものの、数基の埋没した横穴墓と、これに伴う多くの埋蔵文化財が発掘されることとなり、発掘期間も大幅に延長された。

今回の発掘調査は大分県教育庁文化課埋蔵文化財第2係主査高橋徹氏、同主査玉永光洋氏、同主任綿貫俊一氏に米町調査を依頼し、地権者、佐伯土木事務所、請負業者(鶴原建設)の協力により、工法の変更等、発掘に重点をおいて進められた。



第1図 弥生町位置図

現地発掘調査は平成4年8月17日～10月12日(27日)、発掘作業員は延べ158.5人となった。これには、弥生町文化財調査委員が実践研修として従事したことは有意義であった。

発掘中には、町内小学校、佐伯史談会など多くの見学もあり、郷土を知る体験学習の機会となった。

広報「やよい」での紹介や報告会の開催、11月の町文化祭や、佐伯市で開催された大分県生涯学習フェスティバルでの出土品展示は、地域住民の文化財愛護の啓発と理解に大きく役立ったと思う。

横穴墓の閉塞石(扉石)には朱塗りのものがあり、熊本ではこれに文字の記人の例があるので期待したが、確認できなかった。

今後は、出土品を常に見学できる保存施設がほしいところである。

弥生町の周知遺跡は、他に小倉磨崖石塔群・榊牟礼城跡がある。これは、来年度から林業構造改善事業にともなう緊急発掘調査が県文化課の指導で「弥生地区遺跡群発掘調査」として実施予定であるが、この調査で縄文、弥生時代の遺跡も発見されることを期待している。これらは、現在編纂中の「弥生町誌」の基礎史料として活用したいものである。

調査団の構成

調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	弥生町教育委員会		
総括	弥生町教育委員会	教育長	宮脇和敏
調査事務	〃	社会教育課長	小野英治
	〃	社会教育主事	三浦靖弘
調査担当	大分県教育庁	文化課主査	高橋徹
	〃	文化課主査	玉永光洋
	〃	文化課主事	綿賀俊一

(小野)

II 遺跡の位置と環境

上小倉横穴墓は、大分県南海部郡弥生町大字上小倉にある。東経131°50'24"度、北緯32°57'55"度に位置する。弥生町は昭和31年に、近隣の三か村が合併してできた昭和村が翌年弥生村と改称、41年町政をしき成立したものである。

原始

古墳時代のものとしては、本書で報告する上小倉横穴墓群を除けば、弥生、縄文等の遺跡は知られておらず今後の調査が待たれる。

古代・中世

毛利氏以前は、古代豊後の有力氏の一つである大神氏に連なる佐伯氏の支配地(佐伯荘)に

属していた。古代律令時代の海部郡穂門郷であったこの地域に佐伯荘が成立したのはおよそ11世紀頃と考えられている。戦国時代の佐伯氏は、概ね大友家臣団の有力メンバーであり、弥生町と佐伯市の境にある杉牟礼城を拠点として、幾多の戦いを重ねた。

13世紀後半の当町域は豊後国因田砦（1285年=弘安8年）によれば、佐伯荘を構成する本荘に含まれ、小地頭の佐伯弥四郎政直が支配するところであった。

上小倉横穴墓のある上野地区は、この本荘の中心であったと考えられる。同地区には、34基の五輪塔と8基の宝塔からなる泉跡跡「磨崖石塔」が存在するが、これらは大神惟武、同惟覚など佐伯一族が1326年～1345年にかけて建立したものである。

江戸時代

現在の町域は、上野村、大坂本村、切畑村、床木村からなる。それらは慶長6年以来毛利高政を初代藩主とする、佐伯藩2万石の藩領と幕府領に別れていた。

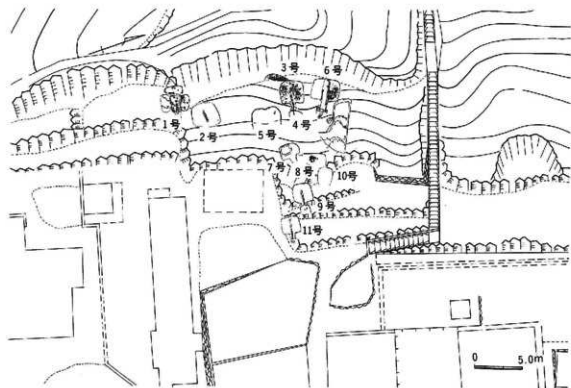


第2図 上小倉横穴墓位置図

III 遺 構

上小倉横穴墓群の正確な総数は不明であるが、これまで少なくとも36基が確認されていた。雨龍山の東側崖面に営まれた上小倉横穴墓群は大きく北群と南群とに別れて分布しているが、今回調査した横穴墓は北群の南端に続くもので、既知のものを若干含むが大半は防災工事途中で新たに発見されたものである。今後とも未検出の横穴墓が工事などで発見される可能性があり、将来的には、通し番号を付け替える必要がある。今回の報告分についてはとりえず仮番号として1～11号の名称をもちいることにしたい。前回報告での分布番号を使用する場合には1号（'92）として区別する。

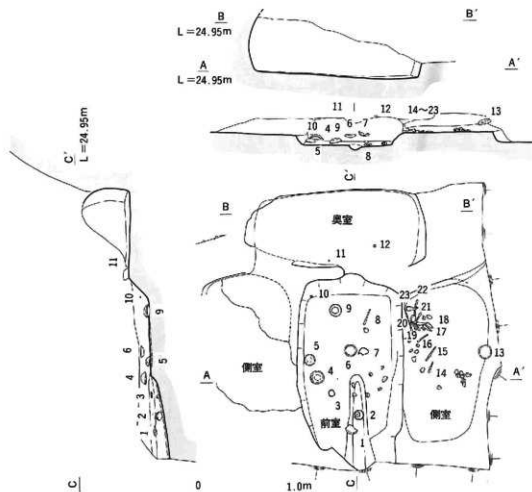
今回報告する11基の横穴墓は、工事および発掘調査によって新たに発見されたものと、これまでその存在が確認されており、物置や穴蔵として付近の人々によって近年まで利用されていたものを含む。各横穴墓の位置関係は第3図のとおりである。1号墓、2号墓と、4号墓、6号墓、および7号墓、8号墓（？）が各々隣接する。3号墓は4号墓の斜め上に位置し、調査したものなかで最も上位にある。5号墓も他の横穴とは離れた場所に営まれている。



第3図 調査横穴墓配置図

1号横穴墓（第4図）

調査区の最も南端に位置し、東に開口する横穴墓である。上半部は破壊され消失し、床面付近がかろうじて残っていた。これを見ると、前室の左右と奥にそれぞれ一室を設けた特異な構造の横穴墓であったことがわかる。各側室、奥室とも、前室より一段高く、かつ壁で仕切られた独立した部屋につくられている。後述するように熊本、宮崎両県の一部に類例が知られており、彼我の関係を示唆するものである。前室床面は長方形で幅約1m、推定長1.9~2m。現状で判断すると、玄関に向かって左右の壁がすばまり、羨道部に続くものであろう。一条の排水溝が羨道部へはしる。右側室は隅丸の不整形なプランで、前室床面から20cm上部に幅70cmほどの入り口を設けていたらしい。奥室も同様で、これは前室床面より40cm以上高く床をこしらえている。



第4図 1号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

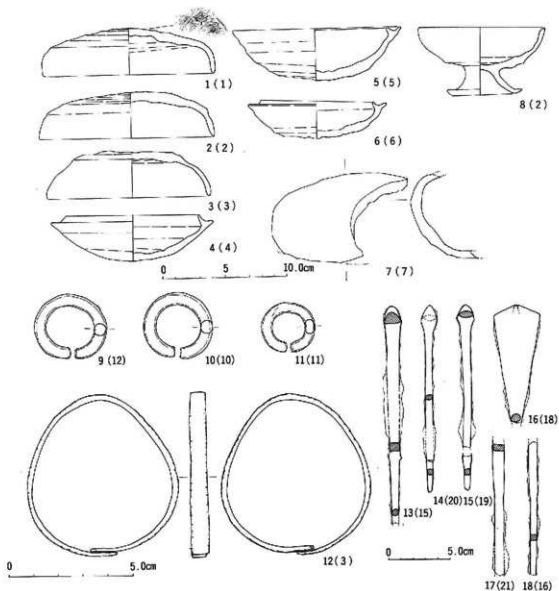
遺物 (第5図)

前室、右側室、奥室から須恵器や、耳環などが出土した。

須恵器

1～8は須恵器である6～8は床面より浮いていたが、他は床面上にあり、しかも、黄褐色の粘土に覆われていた。坏身(4～6)坏蓋(1～3)、平瓶(7)、低脚杯(8)がある。TK43式～209式に属し、6世紀後半～7世紀前半に比定される。

銅釦(12)幅6mm、厚さ2mmの青銅板を腕の形に折り曲げたもので、表面は緑青に覆われて



第5図 1号横穴墓出土遺物実測図

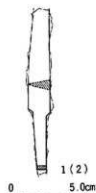
いる。長軸で内法5.9cm、幅5.6cmを計る。外面の縁部には細かい刻目が施されている。

耳環（9～11）銅地金張の製品で前室と（10）、奥室（9、11）で検出された。

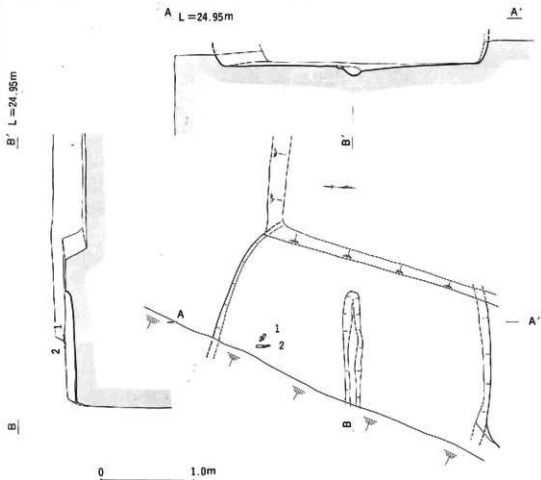
鉄鏃（13～17）11本程度検出したが、錆びの為め図示できるのは限られる。主頭斧箭式（16）の一本を除き、他はすべて長頸の箭箭式である。

2号横穴墓（第7図）

1号横穴墓の北側にある。東向きに開口すると思われるが、玄室の床面、それも一部を残しているにすぎない。玄室の最大幅は現状でおよそ3mを測る。床面には15～20cm、深さ5～6cmの排水溝が設けられており、羨道部方向に伸びている。出土遺物とし



第6図 2号横穴墓出土遺物実測図



第7図 2号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

ほとんどであ
製品が出土し
遺物(第10
須恵器(1
削りが施され

A
L=24.38m



0

1.0m

ては、玄室南側の床面に接して検出された、鉄製刀子1点(2)および鉄鏃の破片2点(1)である。

遺物(第6図)

出土遺物のうち鉄鏃片は錆びの塊となっており、刀子のみを図示する。これは刃部と茎の先端を欠くが、推定全長15cm内外である。

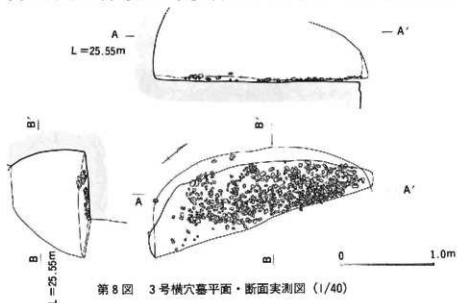
3号横穴墓(第8図)

平面図では4号横穴墓の西隣に位置するが、その床面は4号墓の床面より約80cm高い。玄室の奥壁および床の一部が辛うじて残っていた。床の平面形は隅丸の方形で、奥壁部の幅2.2m。奥壁は緩やかに内湾しながら天井へ向かって立ち上がる。残存する床面には、小石が敷かれていた。もともと、床の全面に敷いていたのか、あるいは奥壁沿にだけなのか、現状では確かめようがない。盗掘、破壊が甚だしく、本横穴墓からは遺物は検出されなかった。

4号横穴墓(第9図)

6号横穴墓の南側に隣接する。上部は消失しており、玄室部、羨道部、羨門部および前庭部の一部の床が残っていた。また羨門部には扉石の一部と考えられる凝灰岩の破片が倒壊した状態で出土している。玄室の平面形は隅丸方形で、幅2.5m、長さ2.3mを測る。玄室前壁の左右の隅が若干膨らみ気味になるのは本横穴墓群の特徴である。奥壁は弱い曲面を描きながら立ち上がる。玄室床には羨門部へ伸びる排水溝があり、これを境にして北側では10~20cm程の礫が小石と混じって検出された。一方、南側には礫が殆ど無く、小石が散乱している。なお排水溝は前庭部にも設けられている。

出土遺物のうち、須恵器はすべて排水溝より北側の玄室床面から検出されている。礫の上や下、あるいはまたその間に挟まれた状態で出土するものが多く、二次的に動かされたものが

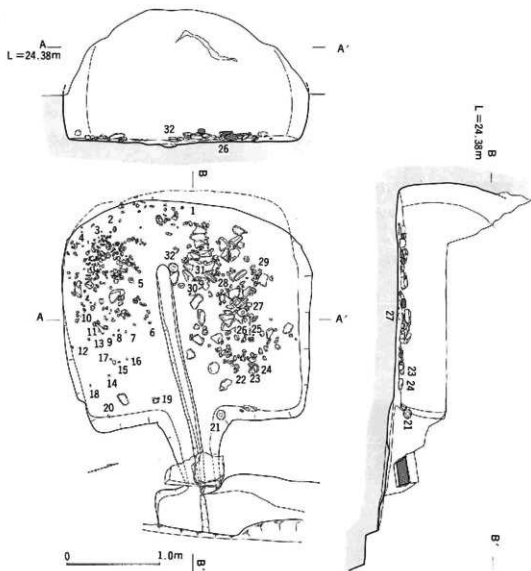


第8図 3号横穴墓平面・断面実測図(1/40)

ほとんどであろう。玄室床面からは他に、金環、銀環、鉄鏃、勾玉、管玉、水晶切り玉、金銅製品が出土した。これらが元位置を保っているかどうかは不明である。

遺物（第10、11図）

須恵器（1～7）1、3～5は坏蓋。1は口径11cmで、天井部から肩部にかけては回転へら削りが施され、それより下半は回転撫で調整。3、4は口径9cmの小壺形で、底部はへら切り



第9図 4号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

離しである。回転無で調整の体部から短い垂直気味の口縁部へ続く。内面には軸痕痕が顕著。5は口縁部に退化した返りを残しているもので、厚い器壁が特徴的である。胎土には殆ど砂粒を含んでいない。6、7は坏身で前者のような蓋と組むものである。底部はへら切り離し。以上は7世紀初頭～中頃に位置づけられよう。2のみは底部に丁寧な回転へら削りがある。短頸壺などの蓋か。

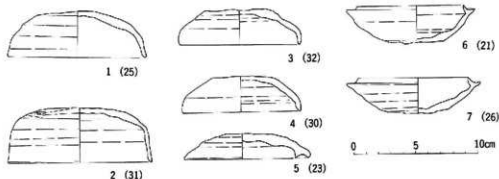
耳環（1～5）5点出土した。1～3が銅地銀張製、4、5が銅地金張製である。

勾玉（6～11）6点ある。例外なく片側穿孔されており、メノウ製。穿孔開始側と反対の面を、前もって大きくえぐっており、この「迎え穿孔手法」の細かな特徴や材質から見て、本勾玉は同一工房で製作されたものであると考える。

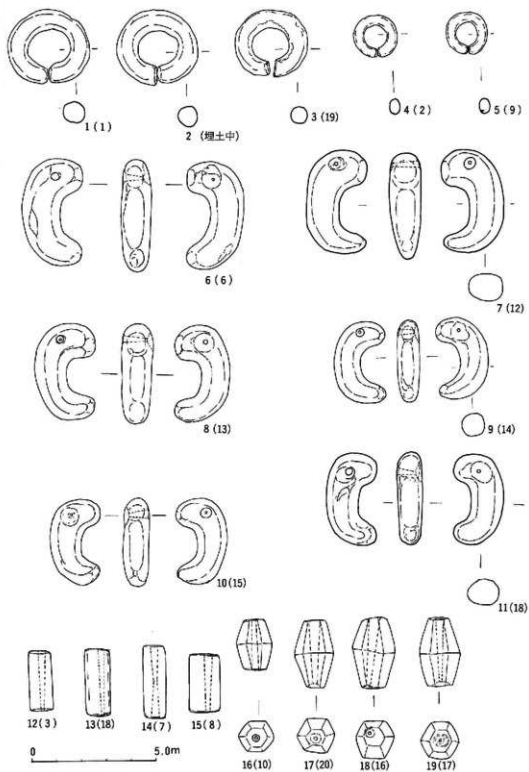
管玉（12～15）すべて碧玉製。14は唯一両側穿孔であるが、他のものは片側穿孔である。色調もこれだけが黄緑色を呈し、他の濃緑色と異なる。

水晶切子玉（16～19）4点出土している。水晶製で五角形に面取りし、すべて片側穿孔である。17～19では、穿孔の終了側の面を浅く穿って、すり鉢状に窪ませた上述の「穿孔手法」が行われている。

金銅製品（図版5） 直径3cm弱の半球状の体部と鑄上の部分からなるもので、外面は塗金されている。厚さ0.6mmと、非常に薄い青銅を用いている。全体の形状を知り得ないが、大きさは10cm内外と推測される。装飾品の一種と思われる。女室南西部の床面（第9図5）から外面を上にした状態で検出されている。



第10図 4号横穴墓出土遺物実測図(1)



第11图 4号横穴墓出土物实测图(2)

5号横穴墓（第12図）

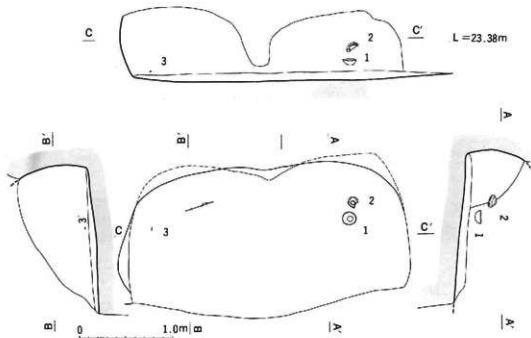
玄室床面の奥半分が残っていた。平面形は隅丸方形であったと考えられる。奥壁部の床面幅2.9m～3mで、奥壁は内湾しながら天井部に向かって立ち上がる。玄室床に排水溝は検出されず、もともと敷設されていなかったようである。奥壁右隅付近の床面には人骨の微小な破片と見られるものが検出され、また近くで須恵器坏蓋（1）と土師器埴（2）が浮いた状態で出土した。玄室左側壁付近では、床面よりやや浮いた状態で管玉が1個発見された。

遺物（第13図）

須恵器（1）は須恵器坏蓋で径10cm、天井部は回転へら切り離し。肩部には回転へら削りが施される。暗青灰色を呈し、砂粒を含む胎土。TK209に属し、6世紀末に比定されよう。

土師器埴（2）非ロクロ成型の土師器埴である。非常に粗雑な作りで、形態も不恰好である。器壁は厚く、不均一。平底の底部は板状工具で撫で調整されており、内湾気味の体部へ続く。口縁部はまるく取められている。内・外面は撫で調整で、指頭圧痕が残されている。胎土に角閃石を多く含む。低火度の焼成のためあまり焼締まっておらず、色調は赤褐色を呈する。

管玉（3）長さ2.5cm、直径8mmの濃緑色をした碧玉製管玉である。片側穿孔であるが、一方の小口側（穿孔が小さいほう）が浅く凹んでいる。「迎え穿孔」である。



第12図 5号横穴墓平面・断面実測図（1/40）



第13図 5号横穴墓出土遺物実測図

6号横穴墓 (第14図)

4号横穴墓の東側にあり、床付近のみが残存する。女室床の平面形は隅丸方形を呈する。女室中央部を通路状に作り、その左右両側に一段高い死床を設けている。左側の死床は削平されているが、右側は床面だけはかろうじて残っていた。それを見ると床に小礫を敷き詰めており、現状で厚さ10cm程度を確認する。礫の間や上で須恵器や耳環、鉄鏃、土師器埴などが出土している。

羨道部は幅45cm、長さ90cmほどで、前庭部に続くが、羨門に凝灰岩を長方形に加工した扉石が残存していた。扉石の基部がはまるように、形状にあわせて溝を設けている。この扉石の左右隅と前方に須恵器埴が各1点副葬されていた。前庭部床中央部には崖面に向かって浅い排水溝が設けられている。

遺物 (第15図)

須恵器 (1~11) 1~2は内面に同一へら記号が施されておりセットを組む。色調もともに灰白色。それぞれ天井部、底部を回転へら削り調整。3も底部回転へら削りの坏身である。以上は6世紀後半。4、5はセットになるのか判断がつかない。未調整の回転へら切りはなし。6~8は口径が9.3~10.3cmと小さく、いずれもへら切り未調整である。8は坏Bの身と見なした。9はへら切り離しの底面に1条のへら記号がある。以上の土器は6世紀末~7世紀前半に比定されよう。そのことから追葬があったことが窺える。

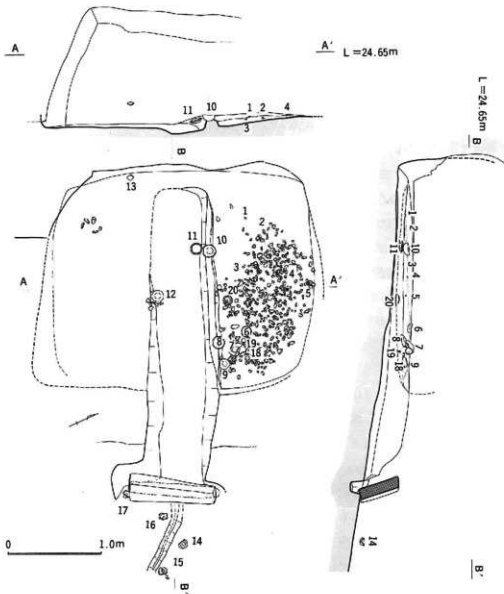
10、11は趣で前庭において出土したもの。両方とも大きさ、形状、焼成等非常に類似している。底部にへら記号が施されているが、同一のもので、以上からこの二つの趣は同一工人の製作になるものと見てよい。

土師器 (12) 非ロクロ成型の土師器埴。灰褐色の土師器埴である。粘土紐巻き上げ後、内・外面を撫で調整で仕上げている。不安定な底部と半球状の体部、外側へ短く弱い屈曲を示す口縁部からなる。器壁は厚く、不均一。口径14.5~15cmと幅があり、口縁部は不整な円形を呈する。器内外面には丹塗が施されているが、使用による部分的な摩滅が見られる。

勾玉 (13、14)

13は瑪瑙製で半透明の橙色。片側穿孔で穿孔の片方の面に迎え穿孔がなされている。長さ3cm。

14は濃緑色をした碧玉製品でこれもまた迎え穿孔を用いている。長さ3.2cm。以上いずれも石

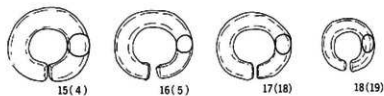
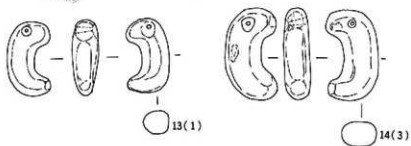
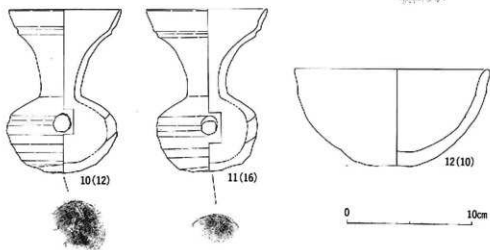
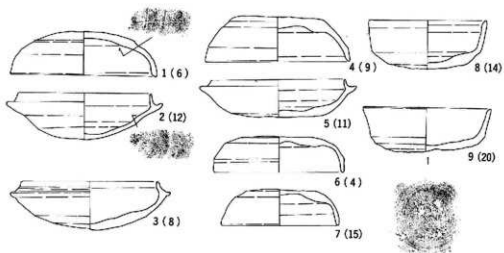


第14図 6号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

材の質はあまり良くない。

耳環 (15~18) 4点出土している。すべて中央の銅地で、銀張製 (15、16) と銅地金張製 (18) の二種類ある。17は箱が剥けており、金張、銀張いずれか不明である。

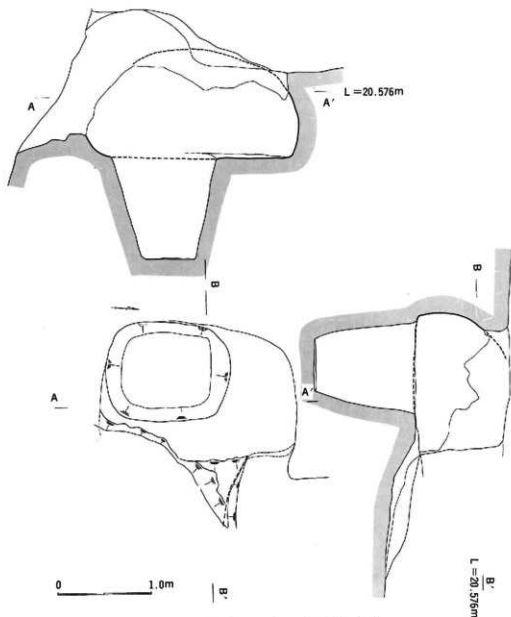
鉄器 その他鉄器と考えられるものが出土しているが錆がひどくて形状は判然としない。



第15图 6号横穴墓出土遺物実測図

7号横穴墓 (第16図)

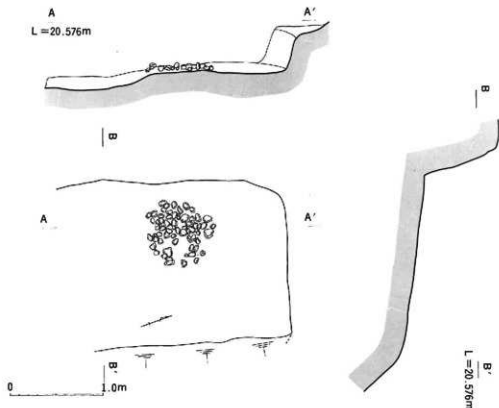
4号横穴墓の東側下方に位置する。東側に開口するが、玄室の下半しか残っていない。しかも玄室床面には後世の貯蔵穴を掘りこんでおり、遺物の出土は皆無であった。玄室は奥壁側がやや狭まる隅丸弱長方形で、縦および横断面は蒲鉾状を呈するものである。玄室奥壁幅1.8m、前壁部分幅2.1m、長さ1.5m、天井高さ推定1mを測る。羨道部は羨門に向けて幅狭くなるようである。



第16図 7号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

8号横穴墓 (第17図)

7号横穴墓の北側にある。テラス状の平坦面があり、ここに10~20cm大の礫が70cm四方の範囲に集中していた。削平された横穴墓の名残なのか確証を持ってないが、一応横穴墓跡としておく。



第17図 8号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

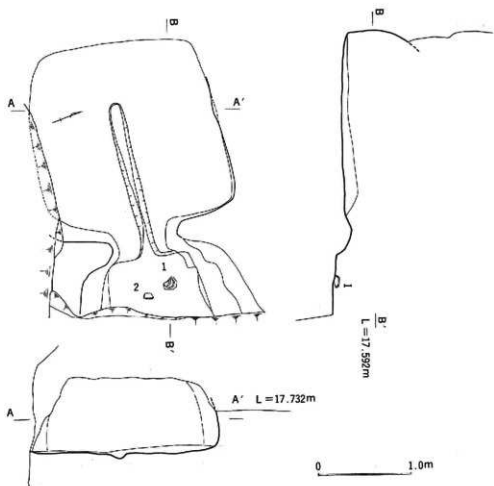
9号横穴墓 (第18図)

10号横穴墓の南に位置する。女室平面形は隅丸方形で長さ、幅とも約2mを測る。天井部の高さは1m内外と推定される。したがって横断面は蒲鉾状を呈する。羨道部は長さ30cmと短く、一段下がった方形の前庭部に続く。女室奥部から羨門まで上面幅15cmの排水溝が設けられている。前庭部では須恵器1点と陶器のすり鉢が出土している。

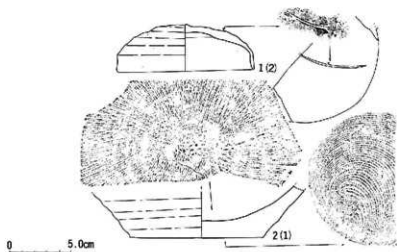
遺物 (第19図)

須恵器(1) 1は坏蓋で復元径10cm、器高3.8cm。天井部は回転へら切り離して、ゆるい弧線状の筧記号が刻まれている。胎土に砂粒を含み、色調は青灰色である。TK209平行で6世紀末~7世紀初頭に比定されます。

襷鉢(2) 焼成は陶質で非常に堅緻密。胎土は砂粒を含まず小豆色。底部径11cmで糸切底である。内面には全面条線を蒔いている。外面は横撫で。江戸時代の唐津産襷鉢である。



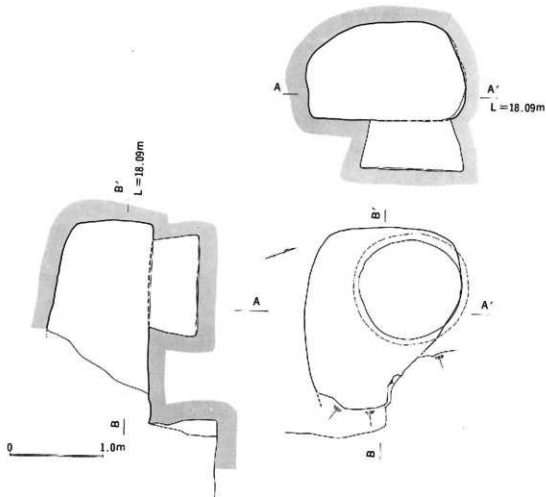
第18图 9号横穴基平面·断面实测图 (1/40)



第19图 9号横穴基出土文物实测图

10号横穴墓 (第20図)

9号の北側にある。玄室平面形は割張りの不整形形で、奥壁部幅1.4mを測る。奥壁は、ほぼ直線的に80cm程立ち上がり、天井部に続く。床面には後世の貯蔵穴が掘られている。本横穴墓からの出土遺物はない。



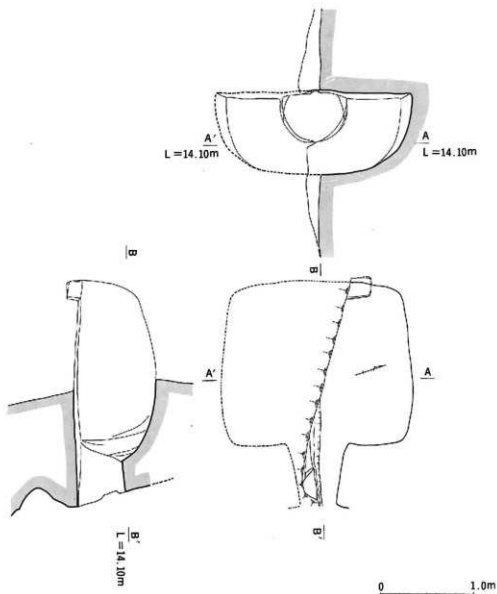
第20図 10号横穴墓平面・断面実測図

11号横穴墓 (第21図)

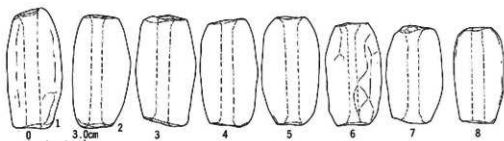
南側半分が消失している。玄室床面は隅丸方形で、前壁左右の隅が膨らんでいる。

奥壁幅1.8m弱(推定)、長さ1.7mを測る。羨道は長さ60~70cmで羨門に向かって、徐々に幅を狭める。玄室から羨門に排水溝が設けられている。奥壁は内傾しながら天井部に至る。天井は最高80~90cmであり、玄室横断面形は蒲鉾状となる。

奥壁に接して長方形の穴を掘っているが、これは後世のものである。なお遺物としては羨道部の先で土釜が一括して出土したが本来の副葬品ではない。



第21图 11号横穴墓平面・断面实测图 (1/40)



第22图 11号横穴墓出土遗物实测图 (1/2)

遺物（1～8）重さ平均54gの土鍔。黄褐色もしくは青灰色で、焼成は良く非常に堅緻である。

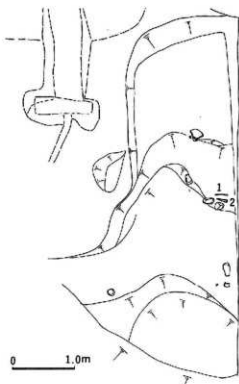
その他（第23図）

6号横穴墓の北側に一段低く掘りこまれ、東側の崖面方向になだらかに下がっていく窪みがあり、ここから鉄鍔2本を検出した。11号横穴墓の副葬品が流れこんだものなのか、付近にある別の横穴墓のものなのか判断がつかなかった。岩層上で、傘大の礫や鉄鍔、須恵器破片が検出された。

出土遺物（1～3）

1は須恵器灯蓋の破片である。天井部に丁寧な回転へら削り調整が行われている。色調は青灰色で堅緻な焼成。

2、3は同一地点で出土した鉄鍔。2は全長12cm、方頭斧箭式に属す型式のもので、錆びに覆われており片側しか筈被が確認できなかった。3は片刃箭式の筈被部。先端部を欠いている。



第23図 6号横穴墓北側遺構実測図



1



2 (2)



3 (1)

0 5.0cm

第24図 6号横穴墓北側遺構出土遺物実測図

IV まとめ

横穴墓の型式分類

横穴墓は盗掘などで造営時期を示す遺物が出土しない場合が多い。そのため横穴墓自体の構造形式で時期を推定する必要があり、横穴墓の形式分類とその編年が試みられてきた（小田富士雄1975「横穴墓総覧」歴史読本20巻8号。佐田茂1975「九州横穴の形式と時期」）

大分県下の横穴墓については、村上久和、池辺千太郎の一連の先行研究がある。

大分の6世紀代の横穴墓玄室床面形は長方形・方形のものが基本で、これに天井中央部に向かって四壁をだんだん狭めてゆく(1)ドーム状の天井部を有すもの、(2)横・縦断面が蒲鉾状の平天井のもの、(3)寄棟屋根形天井のものに大別される。豊前では(2)の平天井のものが主流で、日田玖珠地区では高さのある(1)ドーム天井のものが目立つ。大分市域では平天井のものが主であるが、古式のものには屋根形や高さのあるドーム天井のものが比較的多い。こうした天井型の差異はそれぞれ地域的な広がりを持っており、こうした地域、系統毎の型式分類と編年が必要である。豊後の6～7世紀の(2)蒲鉾状平天井系横穴墓は以下のように分類される。

I類

玄室は四壁が垂直に立ち上がり、天井部との境が明瞭で、鴨居状の段を有する。比較的天井部の高いもの（I-a類）と、天井部が低くなったもの（I-b類）に細分される。

I-a類（飛山4号墓式）

上ノ原21号墓、飛山1号墓などを標識とする。この期はMT15式～TK43式に行われたことがわかる。

I-b類（飛山14号墓式）

下郡5号墓などを類例とする。6世紀後半に中心がある。I類で最古例は豊前南部の三光村所在上ノ原横穴墓群で確認されており、豊後の大分市域に存在するI-a類はこの地域から伝わったものであろう。I類の最新例はI-a類、I-b類ともTK43式の時期が比定される。

II類

玄室の鴨居状天井部が姿を消し、側壁面と天井部の境が前段階よりも不明瞭になる。床面から垂直に立ち上がっていた壁も、天井部に向かって内湾気味になる。横断面は蒲鉾の横断面状を呈する。縦断面でも、奥壁と天井の中心部までは極めて緩やかではあるが湾曲を残している。天井までの高さがあるもの（II-a類）と天井高がそれほどないもの（II-b類）にわける。

II-a類（飛山3号墓式）

飛山3号墓などを標識とする。このうち最も遡るのは、飛山3号墓でTK43式の須恵器を副葬する。

II-b類 (飛山13号墓式)

I-a類に後続する時期として飛山13号墓を想定する。屋宗1号墓ではTK209式が確認される。

以上のようにII類の時期を6世紀後葉～7世紀前葉に比定する。

III類 (飛山7号墓式)

玄室天井部が低くなる。横断面では高さの低い蒲鉾状を呈するが、縦断面では天井上面が平坦に表現されるようになる。

飛山7号墓、飛山30号墓などがこれに分類される。次のIV類との比較で、III類を7世紀前葉～中頃に位置づける。

IV類 (屋宗4号墓式)

玄室の横断面、縦断面共に長方形の箱形を呈するもの。屋宗3号墓を標識とする。7世紀後葉のものである。

今回調査の上下小倉横穴墓では、玄室の上半部が消失しており、厳密には上記の分類に当てはめることができない。しかしながら、出土須恵器や残存部からみて、1号横穴墓を除きおおむね(2)蒲鉾状の平天井タイプ・II類に属するものと思われる(3号～9号、11号)。10号墓に関しては、玄室縦断面の天井部が平坦になっており、III類に比定される。出土の須恵器も6世紀後半～7世紀中頃に矛盾しない。1号横穴墓は複数の玄室を有するもので、県内では初出の例である。類例は熊本県古城横穴墓群、同瀬戸口横穴墓群、同湯の口横穴墓群等、肥後の菊池川流域や日向地方に少なからず存在しており、本例もこうした地方から導入されたものであろう。被葬者が上記地方と非常に強い関係(例えば婚姻関係)を有していたと思われる。

一般に、こうした横穴墓もしくは小横穴石室墳等、群集墳の被葬者は有力在地農民層と考えられており、来るべき律令社会の在地的官人層を形成する集団と考えられている。弥生町を含め大分県南部の古代社会の実態は、資料不足のため未だ不明といわざるを得ず、上下小倉横穴墓群の継続的かつ全面的な調査の果たす意義は大きい。今後とも完全保存に努めながら、その歴史的背景を追求しなければならない。

参考文献

- 高木 正文「古城横穴墓群」熊本県文化財調査報告書第4集 1985年
- 中村幸四郎「湯の口横穴墓群」山鹿市立博物館調査報告書第5集 1985年
- 中村幸四郎「城横穴墓群」山鹿市立博物館調査報告書第6集 1987年

図版 I



遺跡遠景



1号横穴墓検出状況



1号横穴墓遺物出土状況



4号横穴墓検出状況



6号横穴墓検出状況



9号横穴墓検出状況



5图-1



5图-2



5图-6



5图-3.5



10图-1



10图-2



10图-3



10图-4



10图-5



10图-6



13图-1



13图-2



15图-1



15图-2



15图-3



15图-4



15图-6



15图-7

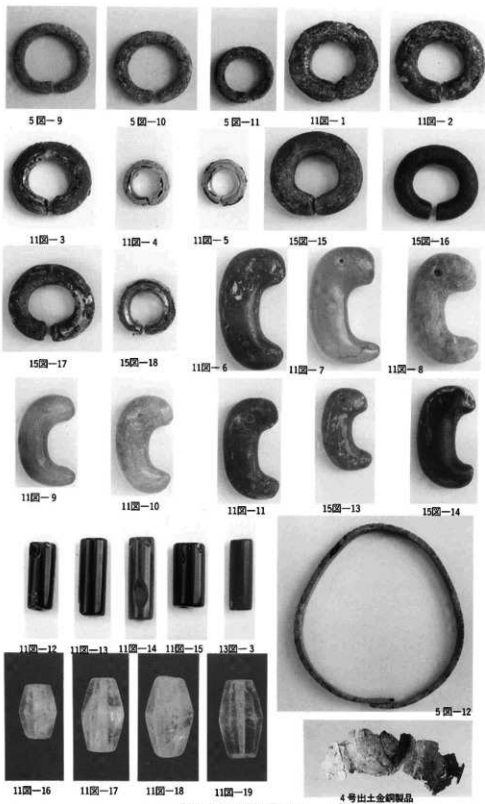


15图-8



15图-10

横穴墓出土遺物写真(1)



横穴墓出土遺物写真(2)

上小倉横穴墓

大分県南海部郡弥生町大字上小倉
所在の横穴墓発掘調査報告
弥生町文化財調査報告第2集

平成5年3月31日

発行 弥生町教育委員会
印刷 佐伯印刷株式会社
